

おみのしゆくより三りゆきていなりやまなり
まつもとよりすぐにごこへいづるみちも
あり。まえにしるすがごとし
ここにいせのぬけまいりを見て

狂 ぬけまいり路用ハつきて

そろそろと 尾を出し

かけるいなりやまかな

狂 うかされてたちよる

ちゃ屋もいなり山

きつねいろなる

ゆばなのまんと

おうらい

あのこもそうたちはすべて

てんがいをかぶったなりでめつたにハ

とらないものだとききました

はたごやへとまったと記

めしをくふときやゆへ

はいると記ハとるで

あろうかどふだろう

イヤイヤ

このほうどもハたとへ

いかやうのことがあつてもこの

てんがいハ とりませぬ

ゆへはいるにもめしをくうにもとり

ませぬ

しかしだうちうで

ひよつとめしもりでもかったときハ

ねると記にてんがいをとります

けれどまたほかの所へかぶせませぬ

オヤオヤ

まつたけが二本はへたとおもつたら

こもそうがきた

二本はえてハるぬ

ぶらさがっているハ

麻績の宿より三里行きて、稲荷山なり。

松本よりすぐに、ここへ出る道も
有り。前に記すが如し。

ここに伊勢の抜け詣りを見て、

狂 抜け詣り路用は尽きて

そろそろと 尾を出し

かける稲荷山かな

狂 浮かされて立ち寄る

茶屋も稲荷山

狐色なる

湯花飲まんと

往来

あの虚無僧たちは、すべて

天蓋をかぶったなりで、めつたには

取らないものだと、聞きましたが、

旅籠屋へ泊った時、

飯を食う時や、湯へ

入る時は、取るで

あろうかどうだろう。

イヤイヤ

この方どもは、たとへ

いか用の事があつても、この

天蓋は取りませぬ。

湯へ入るにも、飯を食うにも、取り

ませぬ。

しかし道中で

ひよつと飯盛でも買った時は

寝る時に天蓋をとります

けれど、またほかの処へ被せませぬ。

オヤオヤ

松茸が二本生えたと思つたら

虚無僧が来た。

二本生えてはいぬ。

ぶらさがっているハ。

丹波島

川中じま舟わたし。水かみはひだのくに
よりおつるあつさ川と、さい川と
ひとつになりいたっての大河なり。
水はやく、すこしのあめにも、とまる
川なり。

ここをわたりゆけは、すぐに
ぜんくハ（ワ）うじのまちなり

狂 おおえ 大江山ならねど酒の鬼ごろし

たひ人

うる家もある丹波じまかな

なるほど、だうちうというものハ
あしばかりほねをおるものだ。
わしのあしをごろうじろ。

すりこぎのやうになってしまった。
しかしうちへかえったら、かかあハ
大よろこびであろう。

一本のすりこぎが三本になって
もどるから

ほんにおとこは、すりこぎになるが、
おんなハだうちうしたら、すりばち
でもなりそうなものだ。

そこで、おとこすりこ木の木しやう、
おんなすりばちのつちしやう、
はじめよし、のちハひろくて

わろしと、さんばそうにありました。
このしゆハ

おとこがすりこぎになったの、
おんながすりばちになったのと、
めづらしそふに、わしがとこの
むすこめを

お寺へやっておいたらとうとう
かまになってしまいました。

川中島舟わたし。水かみは飛驒の国
よりおつる梓川と、犀川と
一つになり至つての大河なり。
水早く、少しの雨にも、止まる
川なり。

ここを渡り往けは、すぐに
善光寺の街なり。

狂 おおえ 大江山ならねど酒の鬼ごろし

旅人

売る家もある丹波島かな

なるほど、道中というものは、
足ばかり骨をおるものだ。
わしの足を御ろうじろ。

スリコギのようになってしまった。
しかし家へ帰ったら、かかあハ
大喜びであろう。

一本のスリコギが三本になって
もどるから

ほんに男は、スリコギになるが、
女は道中したらスリバチに
でもなりそうなものだ。

そこで、男はスリコギの木しやう、
女はスリバチのつちしやう、
始めよし、後は広くて

わろしと、三番叟にありました。
この衆は

男がスリコギになったの
女がスリバチになったのと
めづらしそふに、わしがとこの
息子めを

お寺へやっておいたらとうとう
かまになってしまいました